

1 母を語る

母について語れば、それは何時も母のぬくもりに満たされなかった幼い頃の思い出となる。それはまた多くの人たちの愛と真心を受けることもあった。この種類の思い出を語ることはあまりにも多く、全てを述べることはできないので、断片的ではあるが、「母」を語ることにする。

(1) 幼い頃の母

小学校に上がるまでは、私は、毎朝母の作ってくれたお弁当をもって、鍛冶屋をしている夫婦の所に預けられた。それから、母は勤務についたのである。その家は夫婦だけで子供が無かった。そこで、十
一時頃まで鍛冶屋の主人の仕事を見ながら、その廻りで遊んで時を過ごしていた。鍬や鎌、大八車の造られるのを見て、その真似をして「向こう鍬」を打ったものである。今でもそれは明確に記憶している。
やがて、鍛冶屋の女主人が朝市に野菜をだし、商いを終え、呉の峠越えをして大八車を引いて帰って来る。それから、白い御飯を炊いて、昼食を作ってくださっていた。この温かい御飯に白味噌をつけてたべるのが、大の好物であった。持参した冷たくなったお弁当は、おばさんが食べてくださった。この優しく温かい真心に育まれ、幼児期を伸び伸びと難なく過ごして、やがて阿賀の小学校に入学することに

なった。

私は、このおばさんをその後母のように慕っていて、学校から帰るとその日の出来事を話しに行ったり、また父母の帰りが遅い時なども其のおばさんの家に行っていた。「あったかい御飯と白味噌」のイメージで、いまでも心に残っている。その人は、私が中学の四年生の時、他界されたと聞いている。葬儀には参列できなかったが、とても悲しかったことを覚えている。今思えば、それはそれなりに心温まる懐かしい幼時期の思い出である。

(2) 病気を気づかう母

小学校の四年生の時、腸チフスにかかり四十度の高熱をだして隔離され、入院した。何時も多忙で、あまり構ってくれない母が、その時ばかりは、退院までほとんど側についてくれたことを覚えていいる。その頃、私は既に自分で御飯を炊いて食事の準備をしていた。燃えにくい木に火を焚きつけて、七輪の上で、とても上手にご飯を炊いていたのである。魚を三枚におろすこともしていた。あるとき戴きものだったろうか、牡蛎を洗って酢牡蛎にしたのが当たったのである。子供なので十分にきれいに洗ってなかったのだと思う。発熱、下痢と、とても苦しかったことを記憶している。苦しみにもまして、入院中、可部の北部、亀山から、祖母や叔父・叔母達が遠路見舞ってくれたことは、子供心にとっても嬉しかった思い出である。まして、母が側にずっとつき添ってくれたという事実は、子供心に十分なる満足

を与えてくれた。その時の母は優しく、とても心配してくれていたことだろうと思われる。此のこと（母が側で見守ってくれたこと）は、片時も忘れることのない母の愛を強く実感したでき事の一つである。

(3) 母の願いにこたえて、（高師、大学へ）

当時、父は広島県立女学校教諭、母は広島県の指導主事とそれぞれの勤務があった。私は、呉の中学卒業の後、広島一中の補習科へ学び、両親の希望で広島高等師範学校へと進学した。母は口喧しく顔を見れば小言を言う人であった。不思議なことに、気が進まないときでも、母の一言で何故かその気にさせられていた。

特別な教育ママでは無かったが、厳しさの中に反抗できないものを何時も感じていて、親の望むままに、広島文理大に進学したのである。

正直なところ、高等師範学校終了でもう勉強しなくてよいだろうと思っていた。それなのに、いつの間にか大学の課程を修了していた。その間、太平洋戦争、疎開、二十年の終戦と世情は移り、戦後の苦しい生活を経験した。更に二十二年（大学一年の時）頸動脈の手術のため、母は入院したが、このときは間もなく回復して退院してきた。

母は翌年再び入院した。私は勉強もそこそこの母の看病と食事の準備などに奔走した。ついに、母は脊椎カリエスで動けなくなり、長期の療養が続いた。しかも母の病は重く生死の間を彷徨しつづけた。

以来看護がつづいた。そればかりか、一方では、学校設立のための資金づくりに奔走する等、今考えると、とても体力と精神力を消耗したものであった。しかし、これ等の困難に耐え得たのも、幸か不幸か戦中・戦後のひどい粗食と労働で鍛えた身体のお蔭であった。「菜びん」とともに育ったといわれるほど、弱かった自分が、丈夫で逞しい青年になれたのは、このような試練に耐え得たからかもしれない。一方、母の教育方針の中の「なせば成る、なさねば成らぬ何事も、ならぬは人の成さぬなりけり」の精神が、無意識のうちに浸透していたのかもしれない。あるいは、母の祈りの力であったのかも知れない。

(4) 母の特技 “物を活かす天才”

母は、特技とでもいえる、物を活かして使う能力を持っていた。学校設立の資金集め等、誠にうまく資金を生み出す方法を心得ていたように思う。一例を述べると、着物をほどこいて縫い替えてそれを教へ子の所に持っていく、買ってもらう。安佐郡久地村や呉市までその荷物を載せて自転車で往復した。又布があれば其れで洋服を作り売りに行く。このような努力のかいあって、資本をかけないで資金づくりを上手くしたのである。ここに母の強靱なる精神と実践力を見ることが出来る。教へ子さんたちは、事情を良く察知してか、快く協力してくださった。私は、来る日も、来る日も荷物を載せて自転車をこいで廻ったものである。これも母の強い信念と特技「無から有」と言える能力がそうさせたのである。

(5) 武田家の嫁としての母―義理がたく、人情に厚い人

母は、武田家の長男の嫁として多くの事を果たしたと思う。年老いた親の世話から、父の兄弟（男二人、女二人）にいたっても親身になって面倒をみた。学費等はもちろん、精神的な相談にもつた。このように、それぞれを立派に成人させ、武田家の嫁として父を扶けながら誠実に責任を果たしている。私とあまり年の差の無い叔父や叔母たちであるが、この度も、入院している母のもとに屢々訪れて母を見舞ってくれ、夜は夜で、付き添ってとても良くお世話をしてくれる。母を兄嫁として非常に慕い尊敬してくれている。これも、母の家族への誠の献身があつた賜物であろうと思うが、今さらながら感謝の気持ちで有難く思うのである。まさしく、学園訓にみられる「責任感の強い逞しい実践力のある人になりましょう」は母が自身で実践した事なのである。

母の実践した、自ら信ずるもの「正義に生き勤労を愛して、責任感の強い、逞しい実践力と謙虚で優雅な人間」とは自分自身を高潔な人間へと錬磨して生きた姿そのもののだと思われる。そして今、家族の人たちの成長と栄達を心から喜び自分自身の生き甲斐として大事に思っているのである。

そして、その信念に基づき、母は教育に全精力を捧げてきた。その情熱は、今なお学園の学生・生徒の「人づくり」教育へと弱った身体をかりたてている。

(6) 学長としての母

母は明治三十四年十一月二十日広島県沼隈郡千年村常石に生を受け、大正七年福山市私立増川実科高等女学校を卒業して、大正十一年広島県実業補習学校助教諭となり、昭和四年四月呉市立阿賀高等実践女学校教諭となった。その後、昭和十七年四月広島県主事に任ぜられ、以来二十二年八月まで、主事を務めた。この間、世情の激しく移り変わる真つ只中で、難しい問題を抱えての激務であったと思われる。ついに母は病に倒れ、病床に在りながら、主事を依願退職して、自らの学園設立の計画を進めたのである。そして翌年、昭和二十三年三月広島県可部女子専門学校を開校した。その後、校長に就任、理事長を兼任して、昭和三十七年四月可部女子短期大学を設立。学長に就任し、教授としても自ら率先垂範して指導に当たった。さらに昭和四十一年広島文教女子大学を設立し、その学長としての任務を果たし、ついに長年の悲願であった大学院を設置した。それは、昭和六十一年のことである。高度な研究と教育の場を創立して、女子大学の完成をとげたのである。ここで母は女子教育の完成を目指し、将来有為な人材を多く社会におくり貢献したいと願っている。また、本学園が地方文化の発展のため貢献したいと念じているのである。

今日、学長としての毎日が多忙を極め、高齢になっても、朝は八時に学長室につめ、夜は遅く十時になっても執務をとっている状態であった。人づくりのもとを人を生み育てる女子にあると確信している母は、長年に亘る教育の経験と自ら実践した強い信念のもとに、女子の教育にまい進し独自の教育をう

ちたてた。その教育目標を三個条の学園訓に示して、各教室に掲げ、自らそこへ赴き、新入生に訓話する熱心な母である。

以上述べたように学長としての母は「意志強固」であって、質素堅実を旨とする「節約家」であり、どんな災難、凶事にもめげない辛抱強い人なのである。

(武田学千)

2 理事長として

私ごとき者が、理事長即ち学園の経営者としての武田ミキ先生を語ることは、僭越至極であり、辞退すべきであると考えた。しかし、十七年間に亘り、「事業の経営について教えられるところ多く、関連して多くの新しい体験をさせて戴いたこと」に対する、報恩の気持ちを込めて、敢て筆を執ることにした。「目を瞑って巨象の一部に触れる」覚悟・心境である。

結論を先に申すと、ミキ先生は、「非常に優れた経営者である」の一語に尽きる。昭和二三年、新制高宮中学校の一隅を借りて開校した、可部女子専門学校「校長一名、教職員専任二名・非常勤三名、生徒一八名」を、四三年後の今日、「大学院・大学・短大・高校・幼稚園を擁し、校地面積八一・九六〇平方米、建物面積延三八・一八四平方米、教職員常勤一五八名・非常勤一〇〇名、学生・生徒・幼児合

計二・四七〇名」の規模の学園に、発展させられた事実が、何よりも雄弁に「ミキ先生の非凡さ」を物語っている。

「運も良かった」と、言う人がいるかも知れない。だが、同じような機会や運に恵まれても、成功する人もあれば失敗する人もある。結局、「幸運は、その人の熱意・工夫・努力が呼び込むものである」と信じている。なお、ミキ先生は、「教育こそ天職である」との信念から、「あくまで教育者たらんことに徹し」、経営者とか理事長とかの言葉の使用を、極端なまでに嫌われる。それを十分承知しておりながら、本稿では「経営者」「経営」という文字を次々と使うことになるので、最初に深くお詫び申し上げます。

さて、人には夫々得手・不得手、長所・短所があるが、ミキ先生が、「学園の経営に成功された秘訣」は、何であろうか。

命懸けの熱意

経営に最も大切なものは何か。経営者が事業に成功するためには、何が最も重要な条件かについては、意見の分れるところである。勿論情況によって異なるが、私は一般的には、「経営者の事業に対する熱意・情熱である」と考えている。経営者が、自分の事業に対して、燃えるような熱意・情熱を持って取り組み、何とかしようとする努力・工夫も自ら生まれ、知恵も湧き、部下も本気になる。当然、成功への

道が開けてくるものと思う。

ミキ先生の、学園の発展にかける熱意は、真に凄まじいものである。一例を上げよう。先生は、長年に亘って、朝は職員と一緒に出勤し、夜は八時・九時まで学園に居残って、事務を整理し想を練り、日曜祭日も一日中出勤して、管理に当り仕事を続けてこられた。文字に書けば、これだけのことになるが、一年や二年の話ではない。草創期に、病に倒れベッドを教員室に持ち込んで、寝ながら陣頭指揮をとられた期間を含めれば、四十余年間毎日・毎日続いたのである。到底人間業とは思えない。全身全霊を捧げ、命を懸けた超人的な熱意であり努力である。この比類のない情熱の根底には、「青年女子の教育によって国家社会を再建し発展させる」、「教育に生き教育に死す」と言う、先生の使命感と信念があることは、申すまでもない。ともあれ、先生の情熱が学園に活力を与え、発展の原動力になったものと信じている。

従って、心を許して遊んだと言う話は、唯一回職員と一緒にハワイに行かれた時以外は、聞いたことがない。個人的な快樂等は、全く顧みられなかった訳である。経営の神様と言われた松下幸之助氏が、「いったん経営者になったら、遊ぶようではあかん。他の人が遊んでおつても働いておるとか、たとえ遊んでいても頭の中では仕事をしているとか、そういうことではない。それでは身がもたんという人もあるかも知れんが、たとえそれで命を落したとしても、大将として本望や。そういうことがかなわなかったら、経営者になるべきではない。上から下まで遊びとか休みとかを考えていて、経営が成功す

るなどということは有り得ない。経営とは、そんな簡単なものではないわ」と事業経営の厳しさを説いておられる。(江口克彦著『経営秘伝』まさに、ミキ先生が実践してこられた通りの話である。その道の達人と言われる人には、共通するものがあると感服した。

ときに、「ミキ先生から学園を取り除いたら、後に何が残るであろうか」と、考えてみたことがある。「殆んど何も残らず、命が無くなられるのではあるまいか」と思った。ミキ先生イクオール武田学園なのである。「これだけ必死になって力を尽せば、世の中に成功しないものは無い」と、教えられた。私の友人・知人にも、経営者のポストに就いた者が何人か居る。夫々彼等なりに情熱を注ぎ、渾身の努力を尽し成功を収めた。しかし、「ほんとうに自分の全生命を懸けた経営者の姿」は、ミキ先生唯お独から教えて戴いた。他の者には、良く言えば余裕があった。悪く言えば、事業と一身同体でない部分が多に残っていた。

なお、経営者に必須の条件として、「不撓不屈の精神」がある。経営に困難はつきものであり、それ乗り越え切り開いて、前進するのが経営の姿である。脆弱な精神力では経営者は務まらない。ミキ先生も、逞ましく強靱な精神を内に秘め、死線を乗り切り、学校火災等幾多の困難を克服してこられた。記載すべき事柄は数多くあるが、「命懸けの情熱」と、「不撓不屈の精神」とは、根本において同じものであり、表裏一体をなすものと考えるので、割愛する。

最後に、ミキ先生も人間であるからは、経営者として多少の欠点があるかも知れない。しかし、経営

の第一条件において、他に類のない実績を示してこられたことで、それを補って余りがあると考ええる。

絶えざる前進

世の中は、絶えず変化して静止することがなく、前進進歩を続けている。特に、最近は変化のスピードが物凄い勢で加速し、目まぐるしい時代となってきた。絶えず自己改革を進めて社会の変化に適応し、社会のニーズに答えるものは栄え、社会の発達に適応できないものは衰滅する。自然界においてすら、流れる川の水は腐敗しないが、一ヶ所に長く静止して動かない水は、ドロ沼と化して悪臭を放つではないか。

ところが、個人でも事業体でも、毎日同じ仕事を繰り返していると、何時の間にか鳴子馴れになって、創意工夫・積極前進の気風を失い、マンネリ化する習性がある。まさに「社会の進歩の原則」に反する現象であり、経営者たる者特別の警戒と対策を必要とする。倒産する企業の多くは、何等かの意味で、これを怠ったのではないかと思う。事業の経営は、あたかも自転車に乗って道路を進むようなもので、ペダルを踏むことを止めれば（前進を中止すれば）倒れる。前に出るか転倒するかで、現状維持は許されない。経営者は絶えず潑刺とした雰囲気醸成し、新しいものを追求し、新しいものを撰取して、生成発展・積極前進を計らなければならない。これが、経営の要諦の一つである。

ミキ先生は、自ら「人間は、常に止まることなく前進しなければならない。知識において、識見にお

いて、仕事において、」と話しておられるが、学園の経営に当たっても、これを実践し実現してこられた。即ち、次つぎと学校を新設し、学科やコースを増設し、新しい校舎・施設・設備を建設導入し、人的組織を拡充整備された。学園の「絶えざる前進」の一例として、上原地区へ進出した昭和四〇年度以後の、校舎等建築状況を取り上げてみると、次の通りである。（面積二〇〇平方米以下の建物は除く。建物の面積は平方米で示す。尙未満の数字は四捨五入。）

昭和四〇年度 文学部棟 面積三・五二五

昭和四一年度 寄宿舎 面積二・三三二

昭和四二年度 寄宿舎 面積一・六五九

昭和四三年度 図書館 面積一・三二三

昭和四四年度 短大一号棟 三・八五六

昭和四五年度 幼稚園々舎 八一七

昭和五二年度 高校の仮移転に伴い

別館一号棟↓五号棟 三・二九一

大学体育館 一・〇一八

寄宿舎 六二五

昭和五六年度 短大二号棟 八七一

高校校舎・体育館 計五・三九九

昭和五八年度 大学本館 二・〇九三

昭和六〇年度 音楽棟 一・〇八四

昭和六二年度 寄宿舎二棟 三・二九五

(一棟は増改築)

昭和六三年度 高校校舎増築 二四八

平成元年度 総合教育棟 五・五五二

美術棟 一・一五三

日進月歩と表現しても過言ではあるまい。絶えず前進発展する学園の変容振りは、創設当時を知る人達にとっては、大きな驚異なのである。過日、昔から中島地区に住む知人を連れて、学園内を隈無く案内したところ、「学園がこれ程までに発展しているとは、夢にも思わなかった。いや大したものだ。全く認識を一新した」と、しきりに感嘆していた。

このような学園の発展は、ミキ先生の「日に新たなり」を目指す、積極的な経営姿勢によるところ大である。

金を活して使う

世の中には金持ちの数は多く、さらに殆んど凡ての人が、金持ちになりたいと願っている。ところが、「金の使い方を知っている人」は真に少い。元来、金そのものに価値がある訳ではなく、金を持った人の生きざま・生活のし方・ものの考え方・金の使い方等によって、「死に金」になったり「生きた金」になったりする。「金の使い方を知っている人」とは、「金を活して使う人」のことである。その人は、個人的な快樂の追求や贅沢な生活には、一文の金も浪費せず、事業を通じて社会の進展や人々の幸福に貢献すべく、手に入れた金を凡て有効な仕事に投資する。そして、投資した金を活す為に、必死になって精進努力し、積極的に研鑽工夫する。そこに、人生の充実感・生き甲斐を求めるのである。本田宗一郎氏等にその典型をみる。

そうは言っても、お互人間には、我利我欲を追求する強い本能があり、また人間が、快樂・誘惑に大變弱い生き物であることを考えれば、これを昇華して大金を正しく使うのは、並大抵のことではない。余程の修練を積んだ、人生の達人でなければ、我欲・我執の克服は困難である。高邁な理想・信念を堅持し、苦心慘澹して困難を克服し、前進を続けることによって、「人生の機微」「金の使い方の奥義」を会得するのであろう。申すまでもなく、「死に金を使うこと」を極力避け、「金を活して使うこと」が、経営者の必須の条件の一つである。そして、ミキ先生は、「金を徹底的に活して使った」数少ない人物の一人である。

武田学園の資産を時価に換算すれば、莫大なものになるであろう。にも拘らず、ミキ先生は学園から一文の俸給も受け取っておられないのである。私生活は、昔の公立学校教員時代及び県庁の役人時代の恩給で、凡て賄っておられる。住家は、今時珍らしいバラックのような建物であり、食事も驚くほど質素な物で済ませ、平素の服装も（知らぬ者は）、何処の田舎の老人かと見誤るような物を身につけておられる。真に徹底した節約振りであり、贅沢とは全く無縁の私生活である。これも、学園に少しでも多く投資したいという念願から発したものである。

公的な学園の経営についても、前節で触れた校舎の建築や設備備品の充実等は、有り余った金で賄われたのではない。節約すべき点は徹底的に節約し、無駄を省き（使用済みの紙類やダンボールまで金に換え、机・椅子・床・天井等の修理も、運転手さんその他の職員の手で行う等）、また計画的に資金を運用して、必要な部面に重点的に投入されたのである。理財の才にも長け、大金を手にしたこともあるが、残らず学園の発展に注ぎ込んでこられた。

人間誰しも、事業の経営がある程度軌道に乗れば、「分相応に」とか称して、世間体に恥じない私生活を送りたくなり、経営にも余裕（無駄）が生じるものである。先生に限っては、微塵の緩みもみられなかった。このように、私生活を全く犠牲にしてまで、凡ての資金財力を事業の発展に活用した経営者は、稀有の存在と申すべく、この精神が学園発展の一つの柱となっている。

迅速な決断

如何なる事業でも、時勢の後を追っていたのでは、発展は望めない。そこで、先を読んで一歩進んだ対応を実行するとなると、どんなに綿密細心に想を練っても、読み切れない部分が残る。将来のことは、やってみなければ分らない。従って、ある程度の「賭的要素」が存在することは、事業経営の宿命であり、トップの条件として決断力が強く求められる所以である。それも時間との競争の場合が多く、迅速を要求される（平素の情報蒐集能力が問われることにもなる）。その決断は事業の運命を左右し、多くの部下やその家族の生活が懸っている場合がある。苦汁に満ちた、身を切るような、祈るような思いであろう。それでも、経営者は決断しなければならない。一度逃したチャンスは、再び還って来ることはなく、優柔不断な経営者は事業を潰す。

さて、ポイント・ポイントにおいて、ミキ先生が発揮された決断力は、見事なものであった。学校の新設・土地の購入・学科の増設・校舎の新築・広島市との土地裁判の妥結等々、凡てミキ先生の決断によって決定し、結果は見事に成功を収めた。ここでは、「附属高校移転の経緯」に例をとって、先生の決断について記すことにする。

安佐市民病院の建設用地として、本学園の中島校地を譲渡し、附属高校を他に移転する問題は、出発点（昭和四八年三月）からコジレにコジれた。最初移転先に決めた高陽町小田の丘陵地帯には、貴重な古墳が埋没していることが分り断念した（四九年一月）。

次に、高陽町矢口の造成地に移転先を変更したが、地域内を流れる河川の下流住民から猛反対が起り、造成着工の目どが立たなくなった（五〇年一〇月）。第三の移転先を早急に見付けることは不可能である。

この間、中島校地の明け渡し期日の延期について、広島市と交渉を続けたが、病院建築着工期日の切迫を理由に進展せず、五一年に入ると、一日も早く立ち退くよう、督促を受けるに至った。数百人の生徒を抱えて、授業を中止することは素よりできず、八方塞がりの状態となって進退谷まった。この時ミキ先生は、大学校地内に仮校舎を建て、高校を仮移転することを決断して、急場を救われたのである。仮校舎と雖も大切な教育の場であるから、いささかも支障があつてはならないとの先生の信念から、特別教室も設えた建物となった（五二年七月移転）。

しかし、これで問題が解決した訳ではなく、学校の設置規準からしても、仮移転は長く許される事態ではない。ミキ先生は、当時誰も問題しなかった大学の裏山に目をつけ（可なり急斜面の森林地帯であった）、唯一人で林の中に入って何回も実地踏査をし、大凡の見当をつけて、この地への高校移転を決断された。後日、測量の結果必要校地の確保可能と分り正式決定した。ミキ先生の二回に亘る決断によって、附属高校は生き残ったのである（五六年九月移転完了）。

なお、ミキ先生は、一方において思い切った決断をされると同時に、他方において非常に忍耐強いお人である。一例を上げよう。ある学科が、創設以来十余年間、入学者が入学定員を可なり大きく割り込む状態が続いた。それでもジツと辛抱して、「レベル以下の者は合格させず、学科の学力水準を維持」

してこられた。財政が豊かでない状況下において、二・三年ならば兎も角、仲々真似のできないことである。その結果大きな教育的成果を上げ、所期の目的を達成することができた。要するに、決断と忍耐が調和して、はじめて危機を回避し、順調な経営を進めることが、できるものと確信している。

誠実な人柄

経営者は、経営戦略・リーダーシップ・管理運営・教育訓練等々について、十分な識見能力を持っていなければ、その職責を全うすることはできない。それでは、このような「職務遂行能力」さえあれば、立派に統率し経営することができるか、と言うとそうはいかない。人間は信頼する上司の下では、全力を尽くして働く気になるが、嫌いな上司の下では、ホドホドに働くようになる。ここに、経営者の「人柄・人徳」の問題が浮び上ってくる。このことは、事業の成否に案外大きな関係を持つのである。

それでは、経営者に必要な「人柄・人徳」とは、どんなものであろうか。いろいろなことが頭に浮ぶが、次の三項目に絞ってみた。

1. 自分の言動に対して責任を持つ
2. 部下に対して温い思遣りを持つ
3. 自分自身に対して厳しさを持つ

ミキ先生は、「誠」という字を好んで揮毫されるように、非常に「誠実な人柄」であり、「人間の道」

に少しでも外れることを、潔癖なまでに嫌われる。言行不一致とか、約束を守らないとか、規則に従わない等ということは、夢にも考えられない。第二に、「公の人」としての厳しさ、仕事の遂行等に対する厳しさは別として（これなくしてはトップの任務は動まらない）、個人的には謙虚で頭が低く、決して威張らないお人である。また、有縁の人に対しては温い心使をされ、「面倒み」が大変良いお方である。退職者や卒業生の就職や結婚の世話等も、電話や手紙で済ますことなく、特別多忙な身でありながら、しばしば先方を訪ねて直接依頼や接渉をされる等、頭の下がる思いがする。

第三に、先に節約について述べたように、ミキ先生は、自分を律することの大変厳しいお人である。私利私欲に走る等ということは微塵も無く、また常に率先垂範される。指揮者が後方から「進め・進め」と言うだけでは、真の活力・ヤル気は起らない。「他に号令し要求するからは、自ら先頭に立たなければ、」という自分に対する厳しい責任感からであろう。次に、十数年前の一つの挿話を紹介しよう。

附属幼稚園の西側に、巾一米の排水溝が流れている。地元との約束で、幼稚園から下流は、梅雨入り前に学園が清掃することになっていた。某日、私が外出先から帰ってみると、二人の運転手さんが腕組みをして溝の傍に立っており、七十才代半ばのミキ先生が、長靴を借りて溝の中に入り、掃除をしておられる。当方は、「ご苦労様でございます」と言うのも空々しく、挨拶の言葉に困った。清掃中、たまたま通りかかれた先生が、運転手さんのやり方に誠意不十分を感じ、「このようにやりなさい」とばかり、溝の中に入られた訳である。「注意・号令」ではなく「率先垂範」となった。体裁とか見栄と

が入り込む隙は全くない。全力投球であり、その心意気は真に尊いものと心から敬服した。同時に私は真似ができないと兜を脱いだ。

ミキ先生の、このような誠実な人柄が、学園内外の深い信頼を得て、学園発展の大きな蔭の支えとなつたものと確信している。

直言する人あり

トップの立場に立つ者に対して、直言できる人・言うべきことを遠慮なく言う人は、貴重な存在である。また、そういう人を持った経営者は非常に幸せである。人の上に立てば立つほど、直言してくれる人物が得難くなり、耳障りの良い話ばかり聞えてくる。人間誰しも、わざわざ悪者になりたくはないし、「たとえ為になることでも、上司の機嫌を損ねたり、耳に痛いことには、触れたくないのが人情」である。

ミキ先生にとって、武田学千先生という得難い直言者が居られることは、この上ない幸運であつた。遠慮不用の間柄だけに、学千先生も随分思い切つてハッキリとものを言われる。ミキ先生も、「何時も親子喧嘩ですよ」と笑いながら、聴くべきことは十分聴き、採用すべきことは採用される。このコンビによって、学園の舵取りが間違いなく行われてきた。美しいことであり、嬉しいことである。

(佐伯 茂重)

3 学長兼理事長として

本稿の執筆に当たって筆者が頂いた題目は、「学長としての人間武田ミキを語る」であったが、私は一九六五年（昭和四〇年）の四月から一九九一年（平成三年）の三月までの二六年間、本学に勤務した年月のほぼ全時期にわたって、はじめ広報部の企画委員会の主任、後に部長代理もしくは補佐として、微力ではあるが全力をかけたむけてきた関係上、学長ともこの広報の件に関して面談する機会が多く、いきおいこの稿も「学長兼理事長としての人間武田ミキ」を語ることになった点を、初めにお断わりしておきたい。実際のところ、二八年間近くで拝見してきた筆者にとって、学長の印象を問われれば、この両者即ち学長としての教育的希求と理事長としての経営理念の板挟みの中で、終始苦闘を続けてこられた方であるというのが、率直にして最大の印象であると答えよう。このことを学長自身もかつて、「本学経営の方針について」と題する文章の中で、つぎのような言葉で述懐されている。

（前略）さてこのような私の願望してやまない女子教育が、少しでも理想に近く行われるためには、教えるものと教えられるものとの間の人間的触れあいを大切にすることが重要であります。本学では年来、各学科各コースのそれぞれのクラスをできるだけ少人数とし、また各クラスにクラス

主任をあてて、教授と学生とが心ゆくまで話し合える場を保障するように、努力を重ねてきました。

——（中略）—— 本学も勿論私学の常として、少人数による教育という理想は、財務の側からの要請と時に相対立するものではありませんが、できるだけ本来の教育理想を貫けるように、文字通り渾身の経営努力を寧日なく重ねておりますのが、学長兼理事長としての私の平常なのであります。自分で申すのはおかしいようですが、時に寝をさき時に食をわすれて、この点の努力を続けているわけでありまして、（後略）

〔広島文教通信第十四号〕——一九七五年九月十日発行

さらにつけ加えて言うと、筆者が昭和三九年四月に本学に着任して以来今日に至る二七年の間、毎年度末の入学試験における可否の判定の会議において、学長は討議の冒頭に必ず、「理事長としては入学者の数はなるべく多い方がいいが、だからといって入学させても無事卒業させる見込みの乏しい者を、無理をして入学させるには及ばない」といった意味の言葉を述べられており、またおおむねその趣意に沿った選考が年々おこなわれて来たと、私は記憶している。

とは言っても、この学長の述べられた趣旨は、至極当然の道理のように見えながら、その実行は必ずしも容易ではない。この稿を読まれる学外の方々の中には、特に現に学校の運営に関係されている方の中には、此の道理が理想に近い形で実行されてきたとはにはわかには信じ難いという方もあるに違いない。そこで、前掲の趣意が実際に行われてきた事の証明として、過去に於て本学で実施されて来た選考の結

第II部 人間武田ミキを語る

1981（昭和56）年度入試状況

	学科別	募集別	志願者	受験者	合格者			入学者		募集 定員
					1志望 での 合格	2志望 での 合格	計		計	
文学部	国 文	1次	52	40	30	23	53	21	34	30
		2次	22	17	8	14	22	13		
	英 文	1次	37	19	14	7	21	5	17	30
		2次	15	13	11	9	20	12		
	初等教育	1次	226	206	82	0	82	45	46	40
		2次	75	64	3	0	3	1		
	計	1次	315	265	126	30	156	71	97	100
		2次	112	94	22	23	45	26		
短期大学部	国 文	1次	177	172	101	0	101	37	47	40
		2次	38	33	20	0	20	10		
	英 文	1次	110	103	66	0	66	21	31	40
		2次	30	29	20	0	20	10		
	幼児教育	1次	238	231	107	0	107	63	77	80
		2次	73	63	20	0	20	14		
	服 飾	1次	47	44	26	19	45	15	38	40
		2次	18	17	13	15	28	23		
	食 食 品 物 管 理 コース	1次	24	23	14	9	23	14	26	30
		2次	12	12	6	7	13	12		
	栄 栄 養 養 士 コース	1次	153	149	93	0	93	42	51	50
		2次	43	35	14	0	14	9		
	計	1次	749	722	407	28	435	192	270	280
		2次	214	189	93	22	115	78		

* 昭和56年当時は、本学の附属高校からの志願者に対しては、別個に入
学試験をおこなっていた（この制度は昭和60年度を最後に打ち切った）
が、この附属高校関係の数字は、この図表では一次募集の数字に算入し
てあることを、お断わりしておく。

果にもとづく数字を、どの年度でもよいのであるが例えば、一九八一（昭和五六）年度の入試結果から、提示してみることにする。（前頁表）

入学者の数が、最終的には募集定員の二割増の程度の数となるように、歩止まりを考慮して可否の判定をするのが、私学の入試の通常であるし、筆者の長年の見聞では、実際には一、二割増はおろか、二倍もしくは三倍の入学者を収容している私学もまれではないように推測される今日の風潮であつてみれば、前掲の数字がいかに厳しい自己規制にもとづく結果であるかを、大方の読者は容易に了解されるであらう。このような、経営的には随分苦しい忍耐をとまなう姿勢を、学長が終始堅持されてきたことに對して、関係者の一人として筆者は、衷心からの敬意の念を禁じ得ない。参考までに、去る平成三年度の入試に際し、定員の約十二倍に及ぶ学生を入学させて、週刊誌に恰好の話題を提供した私立大学が、実際にあつたことを書き添えて置く。

入学試験に際してのこの厳しい自己規制に関しては、更に是非付言しておきたいことがある。それは本学では一九六九（昭和四四）年度以来、試験成績（かつては高校からの内申点つまり評定平均値を考慮しない三百点満点であつたが、昭和五七年度から、内申点を五十点満点としてこれを足し、三百五十点満点とした）が、受験者全員の平均点（算術平均である）の七割に足りない者は合格としないとの原則を立てて、これもまた頑固に守つてきた（この処置は文学部、短期大学のそれぞれにおいての取り扱いであることは言うまでもない）。具

体的に言うと、某年度の文学部の全受験者の試験成績の平均点が一九二点であるとする、一三四・四がその七割であるから、その年度の文学部の受験者については、一三四点以下の得点の者は合格者の中に含めないということである。最終入学者の見込み数が、ことによると定員を割る可能性のある学科では心情的に、この点数以下の者でも入学許可者の中へ算入してほしくなりがちなのであるが、この鉄則を前にしてはあきらめるほかは無いのである。

これは筆者がその昔某高等学校に五年ほど勤務した時に、毎学期末の全校生徒の学習成績を見ていて、その成績がクラスの全員（此の高校では各クラスの人数はほぼ均等で、大体五十人程度であった）の総平均点の七割に達しない生徒は、大抵の場合にさまざまの教育上の問題をかかえている生徒であることを實地に知った私の、個人的な過去の体験に基づいて、二年の準備期間の後に筆者が教授会に提出して了承を得た方針であって、学長からも快い承認を頂いて実施に踏み切ったものである。以来学長が此の方針の方も終始堅持されてきたことについて、提案者として深甚な感謝の念で一杯である。大学であると高校であるとを問わず、歴史の浅い私学が長い歴史のある、特に戦前からの伝統に支えられた数多くの私学に追いつき、これに伍して行くためには、このような自己規制が是非必要であると筆者は信じているからである。

以上学長としての教育的願望と理事長としての経営理念の狭間にあって、学長が長年いかに苦心を続けられて来たかのごく一端に触れて述べたわけであるが、与えられた紙数の中で最後に記して置きたい

ことが今ひとつある。それは学長の強い精神力についてである。この事については、学長の日常の精力的な仕事振り（例えばその中の仕事時間だけを取りあげてみても、毎日早朝から学長室に入られ、夕刻は定時を大巾に超えて勤務され、時には午後十時頃まで執務を続けておられる。しかもこれが、夏冬の休暇中にも、全然変ることがないのである）を間近に拝見しておれば立ち所に分かる事であり、あるいはまた昭和五八年十一月発行の「武田学園創立三十五周年記念誌」の冒頭に載せてある、学長の「武田学園創成私記」と題する自叙伝を一読すれば、即座に了解できるわけであるが、にもかかわらず一言触れて置きたい。

学長はこの自叙伝の「女学校に入学」の項の中で、自らもつぎのように述べられている。

（前略）舎則はみんな厳守していた。消灯後、勝手な行動やおしゃべりをする者は一人もいなかった。豆電球のほの暗い下で、教科書を開き、頁を繰る音にも気をつかいながら勉強したことも、試験時には夜明けに便所へ入って勉強したこともあった。自分ながら強い精神力を保持していたことには自信がある。あの頃も、又今もその精神力においては一寸も変わらないが、（後略）（十三頁）

舎則というのは、学長が入寮されていた寄宿舎の規則のことであるが、この同じ項の最後に記されているつぎのような言葉に注目して頂きたいのである。

(前略) その代り、頑張り通した。卒業の年の冬休み前、感冒から急性肺炎を起こし、更に運悪く肋膜炎を併発して一時苦しんだが、卒業を控えて今病気に負けてなるものかと、元気を出して養生に専念した。お蔭でこうした大病にしては僅かな期間で治癒したので、目度度卒業が出来た。

(十四頁)

此処に学長は、事も無げに「こうした大病にしては僅かな期間で治癒した」と書かれているが、此処のところは学長の、余人の遠く及ばない強靱な精神力を、余す所無く物語っている記述であることを、見逃がしてはいけない。

つまり筆者のような、人生五十年と言われた古い時代に青年期を生きた、所謂戦前派世代の、あまたの経験や見聞に照らして思う時に、これは文字通り「大病」であると容易に理解できるが、戦後の抗生物質その他の医薬の迅速かつ長足の進歩のおかげで、「大病」と称すべきものの発症例の数が、昔に比べて極めて少なくなってきた今日の時代の若い人々には、学長の記述の中にある「肺炎」とか「肋膜炎」とかいった病名を見ただけでは、此処の記述の意味が十分に読みとれないのではないかという気遣いを、筆者は抱くのである。どうか此の書を読まれる青少年諸君に於ては、此処に引用した学長の述懐の意味する所を、過たずに味得して頂きたい。そしてその為にも、できれば此の言葉が書かれている学長の自叙伝そのものを、是非熟読して頂きたいものと、切に希うのである。

以上の他にも「学長兼理事長としての人間武田ミキ」の題の下に語るべきことは二、三に止まらないが、紙数にも限りがあるので、それらについて述べるのは別の機会に譲ることとして、この稿は一先ず此処で筆をおきたいと思う。

最後に、武田学長が今後とも長らく健康を維持され長寿を保たれて、我々後輩に対し何時までも、精神的な励ましを与え続けてくださることを、心からお祈りする次第である。

(小川 登)

4 “校長さん”

“校長さん”と、私はずい分永い間、武田ミキ先生をそう呼んでいました。

武田学園に私がお世話になり始めたのは、広島県可部女子高等学校と称して家庭科だけ設立されていた時代からで、昭和三十三年四月、私が広島大学の大学院に入って二年目の春からです。

病弱で就職することが不可能で、大学院に残るぐらいしか方法のなかった私ですが、当時の制度から三月末にならないと大学院に残れるかどうか判らず（三月中旬に大学院の入試があったように思います）、入学することが決まって“さてこれからどうして大学院生活を送るか”と考える始末。農地解放やら財産税やら、戦後の経済変動で完全に没落していた田舎の小地主だった我家は、子沢山の何とやらで赤貧洗

うがごとし、とても我家から生活費の支出を望むことは出来ない有様でした。大学生時代はほとんど病床に置いていましたのでアルバイトをする余裕ありませんでしたが、身分不相応な大学院生ともなりますと、少しはアルバイトをして学費ぐらいはかせがなくてはなりません。と申しましても世間知らずで人見知りをする人間でしたので、自分から積極的にアルバイト先を探すだけの才覚ありません。学友はどの人も三才歳下で相談するのも気がひけるし、広島大学の先生方にはアルバイトの相談が出来るような雰囲気がありませんでした。結局は可部高校の第三学年での担任で、何故か個人的にも御相談に乗っていただいていた（それは上から下まで各種でありまして、恋愛問題から進学問題に至るあれこれでした。私だけでなく、クラスの級友は大なり小なり同じことだったでしょう）武田学千先生にお願いして週二日間の時間講師に採用していただいたのでした。当時武田先生はミキ先生の親里の常石造船KKの子会社である常石鉄工所を経営しておられ、可部の方へは副校長の肩書で時に顔を出すという具合であつたようです。そこでアルバイトのお願いに行つたのが三月末で、その年はもう時間割が決定していて空きがないということで、結局次の年の昭和三十三年四月から週二日間の時間講師に採用していただいたのでした。前から学千先生の教え子というので面通しは済んでいたもので、事前面接などなく初めから新人らしからぬ生意気な態度で出校していたのではないかと思います。そして最初の中から武田ミキ先生を「校長さん」と呼んでいたのです。「校長先生」ではなかったと思います。何故そう呼んでしまったのか判りませんが、他の先生方もそう呼んでおられたのだと思います、そこにこの学園の雰囲気があつたのかも知れま

せん。

時間講師でありながら、峯元という教頭先生になられた人を金子金治郎先生に依頼されて紹介してたり（昭和三十二年に教頭になっておられるので、時間講師になる前からゴソゴソしていたのでしょう）、可部高校の一年後輩である小田正彦先生（現在の付属高校の教頭先生です）が教務を担当しておられたのだからでしょうが、二年目ぐらいからは時間割作成に参加したり（自分に都合のよい時間割を作ったからだと思います）、家庭科の高校ですから進学希望者として極少でしたが、その三四名の生徒相手に進学指導めいたことをしてみたり（成功したのはありませんでしたけれど、その経験が短期大学創りという発想を導いたのかも知れません）、二日しか出校しなかったにしてはバタバタと忙しくしていたようです。校務にも心安だてに口出ししていたのかも知れません。気楽に「校長さん」の部屋に出入りしていましたから。

当時、私立の高校を統括していたのは、広島県では広島県庁の総務課で、文教係というところが直接の窓口になっていたようです。その係長さんが井上清という先生で、中原の旧校地から中島の新校地（今の広島市立安佐市民病院の位置する所）に移転して、新しい鉄筋コンクリート三階建ての校舎を新築した時（当時可部町周辺に三階建ての鉄筋コンクリートの建築物は少しも見られない時代でした）、その井上先生が視察に来られました。私は時間講師でありながら、大きな顔をしてウロウロしていたのでしよう、井上先生のお目にとまってしまったようです。私はそれまで井上という人がどんな方か知らなかったのですが、その丸いテカテカと血色の好い顔を見てアリヤと思つて、あまり表に出ないようにしていたと思うので

すが、隠れていたわけではありませんので「横山という男がいる」ということを認識されたようです。十年近く前のこととて、忘れておられると私自身思っていたのですが、どっこいそうは問屋がよろさなのであります。

この井上清先生という方は、私が広島県立可部高等学校の第二学年に編入（私立の崇徳高校からの編入ですから、男女共学・地域制導入という大変革時ではありませんでしたが一種の脱法行為ではあったはずですが、私だけではなかったのです。このような変革時には大目に見られたのでしょう）させていただいた時の校長先生であつたのです。そして私が高校二年生の終りごろ、三年生が入試準備に入つて普通科の生徒はあまり学校に來なくなつていた時に、校長排斥ストライキが起きてしまったのですが、その時の校長先生でもありました。昭和二十四年の年度末のこととて、当時全国的に類似の事件が起きていたようです。戦勝国である米英加などの進駐軍政下（広島では呉に進駐軍がおり、イギリスかオーストリアの軍隊だつたでしょうか、司令官殿は県知事さんよりもエライ人でありました。ストライキの最中に、司令官宛の陳情書を英文で書いて提出したりしましたし、視察にも誰かエライさんが一度來たりしました。変な時代でした）における新旧のもの考え方の衝突現象の一つだったのでしょうが、広島県下では珍らしい事件であつたようです。そのストライキ惹起の責任をとつて、井上校長先生は辞任されたのでした。その騒動の主謀者の一人に目されていたのが私で、井上先生にとっては獅子身中の虫といふべき男であり、忘れようにも忘れられない男であつたのでしょう。

「あの男は何をするか判らん男だから、用心なさい。決して気を許してはいけません」という警告が、その井上先生から武田ミキ校長に対して発せられたそうです。何時も図書室の中で時には授業をさぼってまでゴソゴソと本いじりばかりしている男、時にはブツブツ小言は言うがおとなしそうな男が、ある日突然に齒をむいたのですから、正に晴天に霹靂で「何をするか判らん男」だったはずでした。その井上先生は、武田学千先生の中学校における恩師であって、昔からミキ先生とは付き会いがあり、当時の井上先生の立場上のこともあって、学園創設時から何かと相談相手になっていた方だったそうです。例えば学園の設置場所について話しをした時に、井上先生は今の長束あたりを推奨されたそうです、今の文化短大があるあたりのことでしょうか。ところがミキ先生には農山村の子女の風儀の乱れを矯すとの意識が強く、安佐地区の中心地である可部に立地しようという意志に変化がなかったことでした。いずれにしてもそうした相談までされた先生から発せられた警告でありますから、武田ミキ校長にとっては非常に重大な意味を持っていたはずでありましょう。

丁度その頃のことです、当時学園では秋口に学園祭なる行事をPRも兼ねて盛大に挙行していました。先生方も生徒の先頭に立って夜を徹して展示の準備をして、若い男の先生方は夜となると一杯酒をきこしめして寝ずの番をしていたものです。時間講師で国語担当ということになれば、家政系中心の展示でしたから私には特別な仕事はなかったはずですが、恐らく弥次馬根性で酒は好き也ということであつたのでしょう、時に寝ずの番に付き会っていました。若い者が一杯呑んで寝ずの番ですから、当然談論風

発という具合になるのです。校長さんからも差し入れがあるので、皆いい気分でワイワイやるわけがありました。そんなある夜が明けて翌朝、眠い目をこすりながら外廊下（現在もグランドの南側にある平屋建の校舎、当時は作法室・調理実習室・理科実験室のある校舎でした）を歩いていると、健チャン（ミキ先生の次男坊で健司君の愛称、只今は武田先生が経営しておられた常石鉄工の社長さんです。当時はまだ学生で、心やすだてに皆さんが「健チャン」と呼んでいました）が走って来て、「オカンが腹立って、すぐ罷めてもらう言うところケ、エーぐらいに言うといってくれーやー」とのこと、何のことかさっぱり判らず内容を問いただしてみると、昨夜の炉辺談話で若い人たちの間から何かと不平不満が出た時に、傍觀者の立場でもあつて「組合でも作ってハッキリと校長サンに物を言へばいい」と私が言ったらしく、健チャンもこんな意見もあるからこういう時代でもあり何か考えなくてはという氣持で母親である校長サンに物申したようなのです。そこで、誰がそんなことを言ったのかなど詮索があり、「時間講師の分際で横山はけしからん、罷めてもらいます」となつたらしいのです。咄嗟に私が考えたことは、ヤネコイことになつたということで、再び武田先生に迷惑をかけるかなということと、次のアルバイト先を探すのはイヤなことだなということでした。酔余の言は、恐らくカゲで不平不満を言うよりも、表に出てハッキリ物を言うべきだとの考えがあり、対等の立場に立つて物が言えないというのなら組合でも作ってしっかり発言したらどうだということだったのではないかと思います。陰でゴソゴソするというのが私の性に合わなくて、言い過ぎては失敗するという人間でしたので、恐らくそんなことだったのだらうと思うわけです。とは申しまして、

今更取消しも出来ませんので、罷めさせられたらその時のこと、まあなるようになるかと覚悟したようでもあります。校長さんのところに弁明に駆けつけた記憶がありませんので。

経営責任者である武田ミキ先生にしてみれば、全く未経験の教員組合などいうものは、創建間のない時でもあり考えられないことであつたのでしょうか。今ふと考えてみると、この時代に学園の中に自然発生的な組合が組織され、自主的に学園内で成長していたならば、戦斗的ではなくて学園の発展に協力的な組合というものとして存在していたら、後年の他律的な組合運動など存在しなかったのではないかということも想定されます。所詮組合活動というものは、自己の利益のみを追求する近視眼的体質を有する傾向があるので、学園の成長発展に資することが出来たかどうか疑問ではありますが、私がその時代に酔余の言として発した真意は、『百家騒鳴たるべし』とのことであつたろうと思います。学園の活力は、へっぴり腰でブツブツ言っているのでは養なわれなないと思つていたからでしょう。当の御本人時には居丈高に言いつのつて言論封殺する癖のあることは、棚の上にあげたうえでの話であります。ところでこの話しはこれで終りです、このことで私自身弁明に行った記憶がないだけでなく、『校長さん』と呼ばれて何か言われた記憶がありません、恐らく『校長さん』の腹の中に入ったままなのでしょう。そして昭和三十五年の終りごろから、可部女子短期大学創設のために、私自身走り廻るということになってしまったのです。校長さんにしてみると言い出しっぱなし時間講師で安あがりだから使ってみるかというところだったでしょうが、校長さんにしてみれば、『何をするか判らん男』で、組合作用を口

にする危険思想の持主というのですから、相当な腹芸ということになるでしょう。当方ほとんどそんなことには頓着せず、信賴されているのだからと我武者羅に前に進むだけだったのです。校長さんと二人で、時に事務担当だった重間とみえさんと一緒に、文部省に日参して申請書作りに没頭したのでした。そんなころ、校長さんと宮城前を歩いて文部省に向つていたとき（二人とも若かったのです、校長さんは五十才前後で私は三十才前、朝早く夜行便で東京に着くと時には歩いて文部省に行っていたのです、新橋から歩けばすぐだし、地下鉄利用すれば何でもないというのは大分後になって知りました）『今の天皇さんはキライド』と私が言ったことがあるそうで（戦時中の広島高師付属中学校で、天皇陛下の赤子だということで典型的な忠君愛国思想によるエリート教育を受けてきたのですから、その反動として戦後の思想的混乱の中で天皇崇拜の念は全く消失していたのです、戦前に教師の代表として天皇の御親閲を受けた経験のある校長さんにとしてみると、全くの危険思想の持主であることを実証していたのでした）。

昭和三十七年度に可部女子短期大学の設置が認可されました。同年に広島大学大学院の博士課程単位修得したけれど名誉ある中退ということで就職先のない私は、その新設の短大に週一コマの文学担当の専任講師として採用されたのでした、当然付属高校の国語の非常勤講師でもあり、事務官でも小使いでもありという何でも屋でありました。井上先生の警告、危険思想の持主であるという認知、これが校長さんの中でどうなっていたのかは知りません。私にとつては口ウルサイ校長さんだが、言うことはよく聞いてもらえる校長さんだったのです。昭和三十七年四月に学長就任となったのですが、私にとつては

当時併任の「校長さん」のままでした。

「校長さん」が「学長」もしくは「学長さん」に私の方で呼び方が変わったのが何時頃か、私には認識がありません。校長と学長併任の期間が相当ありましたし、短期大学と付属高校が同居していた期間も当分でしたので、その移行期間が不明確なのです。しかし今では私を含めて「校長さん」と呼ぶ人はいません。ところが、最近学長は肺炎にかかって入院しておられたのですが（もう退院されました、九月二十八日です）、その病床の看病に当たっている一人の人の口から、化石とも化したかと思っていた「校長さん」という言葉を聞いたのでした。私どもが短大設置のために合宿作業をしていた時、学長の身の回りの世話をしている、昼食には大好物のソーメンを運んできてくれた定木昭子さん（現在は天下さんです）が、今は定期的に学長の看病をしておられるのですが、その人の口から直接学長を呼ぶのに「校長さん」という言葉が出て来たのです。オヤと思って「アンタア今でも校長さんいうて呼んどるんかア」と問うと、「どうしても昔からの癖で「校長さん」としか呼べないんですよ」との答え、それを病床でミキ学長はニコニコとうれしそうに聞いておられるのです。「校長さん」という呼び方をなつかしんでいるような風情でした、学長の教育の原点がここにあったのでしょうか。

〔付記〕井上清先生の警告については、後年何らかの世間話の中で学長自身からこんなこともあったと聞いたことです。組合作用を口にする者は罷めてもらいますと「校長さん」が言ったという話については、学

長から遂に一度も聞いたことはありません。物憶えが人並みはずれていい学長のことですから、忘れておられるということはないと思いますが、案外一時の発言ですぐ忘れてしまわれたのかも知れません。天皇キライ発言については、私自身はきれいに忘れているのですが、後年学長から何度か言われたことです。その時に私が笑いながら学長の問題発言の一つをあげつらうのですが、それは部外秘といたしましょう。

(横山 邦治)

5 恩師として

はじめに

数人の方々から、教師としての武田ミキ先生の回想を語ってもらった。一方で教師としての武田ミキ先生を書いて頂いた。

皆さんのお話しは絶えることなく続き、学長先生の教師像は明らかにされた。

その結果を纏めることは、難しいことだが、次のように纏めてみたい。

- 一 本物の愛情、慈愛の人
- 二 自ら率先垂範の人
- 三 忍耐と努力の人

四 無から有を生む人

五 清貧に耐える人

六 強刃な意志と実行力の人

七 誠を貫く人

卒寿を祝つて

今、強烈な印象として思い出されるのは、古市校舎で校長室兼教員室となっていた畳の部屋の正面奥にギブスベッドを据えその上に仰臥の姿で職員会議をされ、生徒に自ら手をとって指導される武田ミキ校長先生の姿であります。

私達は日本刺繍やつまみ絵の指導を受けました。病床にあらねながら常にやさしく色を合わせてくださり、刺し方の御指導をしてくださいました。しかし廊下を走ったとき、電話が鳴ってもすぐ出なかつたときなど、ひどく叱られて「もう学校に行くのはいやだ!」と思うこともありました。それでも次の日がくると自然に足は学校に向かっていました。それは校長先生は『面倒見が良く、厳しい中にも慈愛を持って細かいところに気を配ってくださる』ことを本能的に感知していたのでしょうか。寮の生活をしていたのですが、寮から家に帰るとき家族の事を細々とお訪ねになり良く覚えておられきめ細かいご注意を受け『行つて来ます』と挨拶をして我が家へ帰つておりました。

その当時、寮生は約百人、通学生が約百人で可部、祇園、鈴張あたりから通っていました。朝、学校に到着すると一番に風呂敷一杯の砂を校庭に運ぶことから一日のスケジュールがはじまりました。

武田ミキ先生の教育者としての姿勢は「我が子」として徹底的に教え諭すものであり「生徒と教師」の関係を越えた愛情で教育されておりました。無理は承知で言う「為せば成る、為さねば成らぬ何事も、成らぬは人の為さぬなりけり」と若い年頃の女の子にとっては理解の程遠い教えでありました。『どうしても……させる』の親心とでも申しましょうか、これ等は教育の一端であります。

お元氣になられた武田先生は、かすりのもんぺで頭にタオルをかぶり御自ら甲斐甲斐しく動かれる毎日でありました。生徒達には率先垂範で教育をされ、先生は当番の生徒が登校して来るのを待機して、一緒に草をとり日直の仕事をされ、校庭には一本の雑草も生えて無く、外壁の崩れかけた古い校舎の板の間は何時も艶やかに輝いて、清掃が徹底していました。そんな時、生徒達は心の中で不満を持ちささやかな反撥心が無かったとは言えません。やがて学校を巣立ち月日が流れ自ら家庭人となり一家をなすとき、その本当の意味を知り、有り難さに気がつき今日の自分があることに心から感謝しています。

『無から有を生む』の精神も先生から教わった実践の一つです。自ら決して無駄をなさらない、物を捨てることは一切無い。そしてボロボロになるまで使いきる。この先生の姿から学んだことは今日もお私達の体の中に生きつづけています。

更に『普通では真似のできないことを成し遂げる』精神、これも『当り前の事ができるだけでは当り

前ではない、それ以上の事を成し遂げねば当り前ではない』ということ。

また更に、『清貧に耐える』精神、粗食に耐え水を飲み鉄の精神とでも申しましょうか、先生は決して美味しいものを好まれず、飲物といえ水または白湯。そして何事にも動じない山のように大きな存在でした。先生の小柄なお体でどこからあのような力と精神が湧いて来るのか不思議な思いでした。そのような先生のお姿(生きざま)、そのことが私達の生活の中で生きています。数々のご教訓により、少々の事では挫けること無く粘り強く生き幸せな家庭を築いております。

以上先生への感謝の気持ちを述べ卒寿のお祝いとし学長先生の益々のご健康と学園の発展をお祈りして止みません。

(卒業生の回顧談より…文責・村木順子)

恩師ミキ先生へ

めでたく卒寿をお迎えになられ、お元氣でお過ごしのご様子、心からお慶び申し上げます。

昭和二十四年四月、可部女子専門学校に入学いたし、ご教授を頂きました。その当時、先生は大病と闘っておられ、いつもコルセットをはめて出勤されていました。そろりそろりと歩かれて、色白の肌に黒髪を肩まで伸ばされ、二つにわけ結んで居られたお姿が忘れられません。きりつと結ばれた口がほころびますのは、挨拶の時でした。入学式、卒業式の時は髪を後にきちんと纏められ、それは又一段と良くお似合いでその姿は校長先生としての風格を一層引き立たせるものでした。廊下を歩くとき

の注意はとくに厳しく、つい嬉しいことなどありますと、我を忘れて大声で話したり、廊下を走ったり、はしたない行動をとり、お叱りを受けたこともあります。

戦後何もない不自由な中での学園生活は、知恵を働かせ、物を再利用すること、何事も人手を借りないで自分ですること等、多くを教えていただきました。

学長先生を始め、平田先生、下垣内先生、垣内先生と、三人の先生方との生活の中で色々としたなめられ、論されながら成長したように思います。数多くの武田精神を習い、身に付けることが出来たのも、学校での実践的活動の賜物でございます。今日の生活では何不自由なく暮す方々が多く、辛抱をする子供が少なくなってきたように聞きます。

学長先生の常に質素儉約を旨とされた御姿勢は、私の心が浮つきましたときの鞭になっております。私自身は生活の中で「謙虚、優雅、責任」という三本の柱を建て、日々反省しながら今日まで生きて参りました。

学校を卒業いたしますとき、学長先生は学校に残って勉強をしませんかと声を掛けてくださいました。が家の事情で早く結婚しなくてはなりませんでした。

昭和二十九年四月に結婚して二人の娘と長男が二年毎に誕生、三人の子供に恵まれ、ただひたすらわが子が成人するまではと頑張って育ててきました。現在では長女、次女とも二人の子供の親となり、懸命に子育てをしている様子を目のあたりにして思いますことは、学長先生の教えが私から娘へと一筋の

道の上を進んでいるように思われます。長男は又主人の仕事を助けて親思いの息子で有り難いと思っております。

現在「礼法講師」という立派なお役目を頂戴いたしましたのも学長先生のお陰でございます。現在「一般礼法」を担当しております。後輩を育てるため又母親になる人を育てるのだと思って指導しております。一日の授業の中で「心を育てる教育」の話題を取り入れ生徒達に話しをしております。

学長先生が高宮町で第一歩を踏み出されて四十余年、卒業生も一万五千人を超える方々が各地において、学園訓を胸に刻み生活をしていらつしやいます。

時々学長室に伺って、学長先生のお元氣な姿を拝しますとき、長い道程でご苦労の多かったことと観察しもうしております。微力ながら多少なりとも学園のお役に立つことが出来れば幸いと思っております。今後益々お健やかにお過ごしになれますようお願いいたします。

(奥田 許子)

恩師ミキ先生の教え

武田ミキ先生は頭のとても良い先生でした。その中でも特に記憶力は抜群で、学内での事はもちろん、生徒の身の上に至るまで良く調べ、覚えておられ、先生の言われることには少しの間違いもなかった。私は先生の印象を次の様に記憶しています。

①怖い（厳しい）存在 歩き方、おじぎの仕方、制服の着方のどこか少しでもおかしい所があればその場で注意された。先生の姿を見ると、それだけで身が引き締まる思いがしていた。その注意は厳しく、生徒たちにとっては怖く思えたのである。

②けじめを大事に 一つのことが終わればすべては元どうりに片付ける、それから次の仕事に掛る。学期のはじめや終わりに、きちんとするべきことを先生より諸注意を受けた。お休みで家に帰るときなど、両親や祖父母への挨拶の仕方に至るまで、教えを受けたのでした。又四季折々の行事も大切に教わったように思う。

③さりげないお心づかい 生徒の家庭の事情を大変良く調べて、記憶しておられて、お掃除の時などさりげなくお話をされて、皆、驚きと喜びを感じていた。丁度、父が病氣をしていた時、心配して父の様子をお尋ねくださったのが、今もって忘れられない。先生のあたたかい配慮として嬉しく思ったことがある。特別な人だけでなく、みんなこのような経験がある。厳しきのなかに優しさを感じた。

④制服は先輩が仕立て下級生へ 一年生に入学すると先輩が縫った制服を受け取る。物の少ない時代なので助かったが、先輩のなかに、上手、下手があり、当たり、外れを経験した。そして又、先輩として、賢明に制服の仕立てをした。そこで、先輩後輩の絆ができたように思う。

⑤体育の時間は作業 学校生活で忘れ得ないことの一つに作業がある。特に体育の時間は、殆ど作業をした。私は中学時代よく作業をしていたので、特に苦痛ではなかった。

⑥夏休みも掃除の徹底 休み中でも当番をきめて登校した。毎日、交代で当番が学校の掃除をした。それも、一日として休む日はなかった。草取りから始まって、校舎の掃除の徹底に努めた。廊下の清掃は、ほうきでごみを掃き、ひどい汚れの所は水拭きして、糠袋でゴシゴシこすって、板の間を鏡のようにした。糠袋は、自分で縫った袋に糠を詰めて作った。

このように改めて振りかえって見ると、先生の教えは、物を大切にして質素堅実を旨として生きることであった。私は、生活は質素で、家族の食事もある程度は作らない。冷蔵庫の物は今だから一度も捨てたことはない。広告の裏紙も無駄な使いかたをしていない。ミキ先生に教えを受けた頃は、ちょうど終戦後の物の不自由なときで、この教えは、自然に身に付いたと思う。

又一面、努力をよくするようになった。子供の教育費、家の新築と出費も多く、家のなかを切り詰めて頑張っている。お教へは身体で覚えているので、つい、お休みの日などは、家の中を徹底的にきれいにしてしまつて、あとでひどくつかれる。二人の男の子も高校生となり、今年はオーストラリアにホームステイして頑張ってくれている。

(原 阿佐代)

6 生活者として

信仰の人

武田ミキ先生の目覚めは教育の為にあり、一日の始まりは四方拝と共に始まる。

九十歳を越えられた昨今の目覚めは少し遅くなられたと聞くが、夜がしらじらと明け始めると待つていたように起床（ここで、学園用務でどなたかに電話をかけられることもある）、身支度を調べ、まず東方に向かいミキ流の四方拝が始まる。これは、ご苦難と激動に満ちた時代を送られた昭和天皇（生まれ年が同じ）や多くの人びとへの感謝と今後益ますの天下太平と武田学園の発展を祈られる。続いて仏壇を拝まれる。これは、嬰兒の自分を残して黄泉の客となられた両親の辛い悲しさを思いやり、両親の顔を全く知らない自分を育てて下さったお姉さん・お兄さん達の無形の恩愛に感謝し、きょうの日のご加護と武田学園の発展を願われる。さらに、教育の道に邁進できる喜びを謝し、武田学園を巣立った人達が社会から喜ばれる人間になってくれますように、この上は、武田ミキの人間教育成就の為に、もう少し長生きをさせて下さいと願われるのである。

これが九十歳を越えられた人間武田ミキ先生の夜明けであり、これが教育に生き、教育に死すことを本懐とされる、教育者武田ミキの一日の始まりである。

夜もまた、感謝と念願に手を合わされる。

このように、朝晩神仏に向かい手を合わせ拝む人を俗には信仰に篤い人と言うのであろうが、先生の場合は、唯々一心不乱に手を合わせ、神仏にすぎるといった信仰とはいささか異なっているように思う。つまり、「我に知恵と力をかし給へ」という悲壮な願望と己と共に学園の教育に携わって下さった人々への報恩感謝の念ではないだろうか。それほど信仰に篤い人ならば、何度も重ねて火事に遭われなかったのではないか、最も近い例を挙げてみると、去る平成三（一九九二）年九月二十七日の台風の大被害も、もう少し軽くてもよかったのではないかと考える。いや、このような悲願や報恩感謝の日を送られるからこそ、度重なる災害や、病気にも打ち勝つことができ、今日の時を迎えられたのではないだろうか。どうも後者の方が真実のように思われる。その心は、恩頼堂の建立や学園創立記念日に恩頼堂で営まれる学園物故者の法要に見ることができる。さらに、あれほど休みの嫌いな学長なのに、お盆休みをおかれるなどもこの心の表れであらう。

このように考えて見ると、怠け人間大嫌い勤勉人間大好き。すなわち、先生にとっての信仰は、単に、寺院や儀式法要の中にのみ生きているものではないようである。たとえ、水汲みであらうと、草取りであらうと、それはみな信仰の道であると同時に人格形成の場であり時である。すなわち、武田ミキ先生の信仰とは「自己の信仰が直接普段の生活と結びついている」自力本願が基本的な考え方であらう。

粗衣、粗食、粗住の人

今や、学園全体に学ぶ人約二五〇〇人、ここに勤める人約一六〇人、これだけの学園の理事長であり、学園長を、人は一体どんな人と想像するであろうか。まず、御殿とまではいかなくてもそれ相応の家に住み、美しい衣服を身に纏い、その時どきに応じた御馳走をいただいてと考えるのが常識であろう。しかし、先生には何一つ当てはまらない。

ある休日初めて学園を訪れた人が、また、学長を全く知らない業者が、「おばあさん」と声をかけたと腹を立てられたことがある。人を外観で判断してはいけないというが、誰が学長を見て、あれほど沢山の表彰や勲三等宝冠章までいただかれた人だと思うだろうか。本当に粗衣、粗食、粗住に甘んじておられる人である。

粗衣——かつて、私は学長の着物、羽織姿に憧れていた。それは凜々しかった。とても立派に見えた。ある時側に寄ってびっくりした。あれほど立派に見えた着物や羽織はいっぱい綻びが繕ってあり、何度も仕立て直しがしてあった。これほど立派な人になると着るものも立派に見えるようになるのかと思ったことがある。つい最近「先生の着物姿はとても素敵で、よくお似合いになるから、着物を着られたらどうですか」といったら「胸を締め付けて苦しくなった」と言われた。昨今の服装は——流行なんて関係ない。これがかつて全国教育界を唸らせた被服の専門家か？……と疑う日も多くなった。

粗住——本当は、もう少し大きく、冷暖房完備の快適な家に、秘書が高級車で送り迎え、となっても

よい。また、側に立派な竹林荘という家があるのに、2DK木造住宅に独り暮らしで頑張っておられる。何故か！

ここは高校生の通学道、大学寮の側、好きな生徒や学生の声が聞こえ、姿が見えるからである。大学の玄関では擦り切れた藁草履が三六五日学長の出勤を待ちわびており、藁草履が見えないのは学長が元氣な証拠、藁草履があるとは何か寂しさを覚える。

粗食——好きなものは神勝寺そうめん、朝・昼・晩・三六五日でもよい。間食一切なし、ただし、牛乳は一日二カップ、それより何よりリポビタンD（これに匹敵するドリンクなら何でもよろしい）、これが気付け薬といって、学会へも、オリゼミへも、何時でも何処でも、そこに滞在する間中の分は持って行かれる。到着するとすぐに冷蔵庫に入れ、朝の目覚めに、おやつ時分においしそうにゆっくりと楽しまれる。これが唯一の贅沢と思われる。

嫌いなもの・身体に合わないもの——コーヒー、お茶は駄目、全て水か白湯、特に嫌いなものは宴会。食べる物が無いそうである。いや、それよりなにより仕事に没頭して食べることを忘れてしまわれる毎日である。

「きれいな着物を着たいとも、うまい物を食べたいとも、大きな家に住もうとも思わん。唯^{ただ}学生を見て、話しておりたい。」といわれる。学長にとってはわれわれの欲望はみんな無駄遣いであり、そんなお金があつたら学生のためにもう一台コンピューターでも買ってやりたいそうである。よく聞く言葉に

「疎食^{そし}を食らい、水を飲み、肘を枕とするも、またその中に楽しみあり」

季節を知らない人

日本は四季の美しい国、昔から、春は花見に夏は螢狩り、秋は紅葉狩りに冬は雪見酒等など、四季を愛でて心慰め、活力を養うのが人の常である。

「学長先生、校庭の桜がもう散りましたね。」

「へエー、わたしはこれまで、何時梅が咲いたか、桜が散ったのか、とんと見ることはなかったよ。」
「まあ、先生の季節ってなんですか。」こんな会話を交わしたことがある。

学長の季節は、春は入学式に始まる。学生を迎える為に学内の清掃から教室のこと、机・椅子の数、みんな陣頭指揮。入学式の次は四月十五日の創立記念日が来る、十年・二十年・三十年と永年勤続の先生一人ひとりの感謝状の文面を真剣に考えられる。これが終ると学園の予算要求に一つひとつ目を通して査定。次は各学科の新入生の皆さんへ、オリゼミ参加の皆さんへ、教育実習生の皆さん、学生に話しておきたいことが山やま。夏は司書講習会。秋は大学祭。大学祭では各学科やサークルの展示も気になることのひとつ、なかでも運動会は大好きであるが、現在の遊びムードの運動会は大嫌い。秋から冬になると学生募集、入試、判定会議と、慌ただしく過ぎるうちに卒業式となる。

このように昭和二十三年に可部女子専門学校設立から四四年間の現在まで、病弱な身体にも関わらず、

手を抜くことなく、一つひとつきめ細やかに、学校教育と経営という大きな大きな仕事を治めてこられた。

人間は常に止まることなく前進しなければならぬと、今日もなお苦心の日々である。こんな日々の中で何時梅が咲いたか、何時桜が散ったか、心のゆとりがあらうはずがないのが真実であらう。全ては学園に学ぶ者達の成長のみを喜びとしてこられ、学長の四季は学園そのものなのだと思われる。

このように、一刻の余裕もない一年の繰り返しの中でも、健康状態の良い時は、道々の草や花を手折り、学長室の大小様ざまな花瓶に生けて楽しむこともある。また、ある年のオリゼミでは、スカンポやヒメジオンを摘んで床の間に生けて楽しまれたこともある。学長の花は花屋さんの花ではない、野に咲く草花や学園の庭の花である。しかし、学長の手にかかるような花でも実に生き生きとしてくるから不思議である。びっくりして褒めると、「わたしは、生け花を習ったことはない。」と恥ずかしそうにおっしゃる。こんな時の学長は実に少女のように純真で穏やかである。だから、こんな時間ができるだけ長く続くことを願わずにはおられない。

「無から有」「為せば成る」の人

人が何か事を興すというときに、大きく分けると二つの起点があると考え。その一つはある程度の基盤となる財力があるか、それなりの後盾となる財力があり、これを基に事業を始める。いま一つは財力はないが、このような事がやりたいと始める時である。武田学園創立三十五周年記念誌によると、武

田学園の出発は正しく後者に属する。学長や創立当時の職員・生徒の並々ならぬ努力の積み重ねであった。言うて見れば「無から有」の精神が今日を築いたとも言うべきであろう。しかし、無が有に成るには何かが無ければ成り立たない。それは「節約」と「工夫」と「継続」しかないと思う。

現在、学園では新年の互礼会と四月十五日の創立記念日に、幼稚園から大学までの全職員が一堂に会し祝賀会が催される。私が勤めた昭和三十九年当時の創立記念日は体育館で折詰をいただいた思い出がある。ところが、出席されない先生方の折詰がたくさん残って大変粗末になったことがあった。いや、無駄が出たと言うべきだろう。学長先生は無駄が大嫌いであるからそれからしばらくは紅白まんじゅうだったと覚えている。

それ以後調理室の記録によると、昭和五十年の創立記念日に、はじめて文教ホールに集まってささやかな手料理で祝っている。また、互礼会が現在のように大きくなったのは昭和五十九年からで、それまでは、するめ・おかき・まめと冷酒であった。このことは裏方を務める者にとっては大変なことである。なぜならば、学長先生が「わざわざお集まり下さる先生方に粗末にならないように、なるべくお金をかけないように工夫して、心を込めてお祝いのご馳走を作りなさい。」とおっしゃる。そうして、多くの人びとからの贈り物をあれこれと準備のために下さり、それからメニューを考えるのである。「できるだけ皆さんと喜びを分かち合いたい」と願われる心があつて、少しの物でもあるだけ出てくる。それがどんなに150人にとって少ない量でも、どこかに学長の心が生きなければならぬと工夫する。こんな時

に「無から有」と「成せば成る」の言葉を思い出すのである。

無形の財で有形の武田学園あらしめるためには、節約の人、工夫の人でなければできなかったであろう。節約・工夫の人、学長の心は全て学園のためにあるのだ、これが即教育なのだ、裏方を務めながら思う。裏方の人びとの労を思い、止めたらどうかとおっしゃる人もあるが、「宴会出席大嫌い、宴会するのは大好き」の心情を知ると止められない。

眠らない人、大病する人

学長は独学の人、努力の人ですべて成せば成る精神で今日まで来られたが、一日は二四時間しかない。いかに立派な素質の持ち主・学長でも、人並な二四時間では、かかる今日は存在しなかったであろう。どうして学長には人より長い一日の時間があつたのか。それは「眠らない人」の一語に尽きる。必勝受験生のために「四当五落」という言葉があるが、学長は三時間眠ればよいとおっしゃる。だからこそ、人生という試験・試験に合格されたのかも知れない。寝つきは実によい、どんなときでも横になるとすぐに熟睡される。夜などもこの調子で二、三時間ぐっすり寝て、これで疲れが取れたと言われ、夜は九時、十時頃まで学長室で仕事に精進される。とはいえ神様ではない証拠に、時々椅子に腰掛けたまま上手に眠っておられるところを見かける。これが実に上手で、ご自分でも気がついておられぬらしい。

しかし、人は眠らないと病気になるというが、そのためか四、五年に一回は大病される。最近はこの

間隔が短くなっている。

「いみまろの（一三〇日）ながきつき日をねんごろに、

ちりょうたまいし、ごおんわすれじ」

これは創立三十五周年記念誌の武田学園創成私記の最後に載っている、昭和五十四年六月二十八日の歌である。この歌は昭和二十三年以来五度の入院生活の退院に際してのお気持ちである。さらに、「今度は学校に帰っても、仕事を半分にして、身体を第一に考え、大切にすることを院長（大槻病院）先生から約束させられているが、私自身も自分のことだからまず自分で大事にすることを決心している。…略…

兎角風邪を引かぬように、過労にならぬように、食事療法をおこたらぬようにするつもりである。」と結んでおられるにも関わらず、すぐに元の木阿弥となり、以来何度大病をされたであろうか。

最近は校医の桑原先生が主治医である。平成元年の夏に带状疱疹に罹られた時、随分苦しまれ、この時は「これでもう死ぬのか、死ぬなら、ここで死にたい」と何度入院を勧められても頑として応ぜず、学長住宅から一步も動こうとされなかった。とうとう、桑原先生の往診と手厚い看病で回復され、今や桑原先生は学長の命の恩人、いや、神様の存在ですらある。

平成三年は病の年であった。

四月ころから風邪気味でしんどいしんどいと言いつつ、校務に励んでおられた。五月の予算査定が終った頃から本格的になり、肺炎をこじらせて寝込まれた。今回はこれがなかなか快方に向かわず、皆が心

配した。

こんな昨今のうち、桑原先生から、「学長先生は栄養失調です。学長先生の健康を考えるチームを作って下さい」といわれた。血液検査結果を伺ってみると全く不名誉なことであった。二月頃から歯の治療のため、食欲がないうえに、もともと粗食の人であるから食事がおろそかになっていたのであろう。あれほど大槻病院を退院されるとき、決心されたにも関わらず、熱中努力型の学長はすぐに忘れてしまわれる。若い時は少々の無理も効くが90歳を過ぎられると細胞の健康保持能力が小さくなり、ちょっと食事をよろそかにすると栄養失調になるのであろう。当時、学長の食事は淳風寮の栄養士が夕食を持参し、それを学長が自分風にアレンジして召し上がり、これで自分には適量とおっしゃっていた。

学長の健康を考えるチームといっても、やはり学長の嗜好を一番よく知っている淳風寮の栄養士にお願いするのが一番。といっても平成三年四月は学生数の急増加、高校入寮生の昼食弁当開始など、いろいろ給食室も大変な時であった。とはいえ、「学長は武田学園の神様、神様の非常時には何をさておいても」と病状に合せ、学長の好きなものを中心に食品構成を作成し、三度三度声をかけながら、様子を見ながら段階的に食事療法を進めた。もちろん神様にも、栄養士に従っていただきますと半命令的に全部食べてもらった。これが軌道に乗るまでには随分きくしくしたくしたが、栄養士が丸となって半年頑張った。もちろん副学長・武田学千先生の献身的な通院付き添い、学内の各先生方の協力のお蔭で平成四年の互礼会を祝うことができ、本当にうれしいことであった。しかし、最近再び、夜遅くまで学長室の

明りがついており、日曜日も祝日も明りが消えないことは喜びでもあり悲しみでもあり、腹の立つことでもある。

「早く死にたかったら、ここに（学長室）いつまでも居りなさい」と副学長に言われても言うことを聞かない学長である。

数字の人

学長の弱いものは唱歌、強いものは何といっても「数字」、一度目に入った数字は全て頭に残る、数字に対する記憶力は超人的で、この点が「独学の人」武田ミキ先生を救ったと確信する。

弥勒の里のオリゼミで墓参に同行した。兄・神原勝太郎氏の話になり、実に数字に強い人で、木場で材木を見て何艘の船が出来ると予算を立てると板一枚も違わらなかったと言われ「自分は十人兄弟の末子、萍なのでつまらん」といわれたが、学長も同じように数字に強い人。建築業者同志の会話をあげると「やれんよオーの、瓦一枚、柱一本覚えとりんさるけエーの、なかなかごまかされんでエー、やねこいでエ。」学内の机の数、椅子の数、畳何枚まで頭の中にあつて、学年初めに陣頭指揮をされるのである。もちろん経営的数字などは言うに及ばずである。

今一つ、学長の弱いところは、人の顔がなかなか覚えられないこと位である。

話好きの人

学長は話好きの人、といっても誰でも彼でもない。相手は主として学生・生徒さらに学園の職員、内容はもちろん教育的なこと。あれほど時間に厳しい方が、話し出したら止まらない、止まらない。

平成三年の五月も「新入生の皆さんへ」の学長講話があった。前項でも述べたように大病の前であったから、時々学長室のソファに横になって休みながら、体調を整えながらの話であった。それでも定刻五分前には教室へ行かれ、学生の前に立たれると背筋をピン、一時間の予定が延びることはしばしばである。一日一回のスケジュールならよかったが授業時間の都合で二回になることもあった。椅子を用意するとひどくお叱りを受け、それほどにしなければならなくなったらもう学生の前には立たないとおっしゃる。よい意味での明治の教育者の気骨とでも言うべきか、われわれ教壇に立つものは見習わなければならぬ。

働く女性の先駆者

現在は、女性が働くのは不自然と考える時代は去っているが、学長が結婚された時代は働く女房は不自然で、いやむしろ肩身の狭い思いをするのが普通であったと思う。ここに「女大学」の十項目の日常生活での行為の仕方を引用すると「女は常に心遣いして、その身を堅俱慎み護るべし。朝は早く起き、

夜は遅く寝ね、昼はいねずして、いえの内の事に心を用い、織り、縫い、績^{つむ}み、絹^こぎ、怠るべからず。亦茶・酒など多く飲むべからず。歌舞伎・小歌・浄^{じやう}りなどの淫^{いん}れたる事を、見聴くべからず。宮・寺など都て人の多くあつまるところへ、40歳より内は余りに行くべからず。」とある。この風潮がかなり残っている明治の後半生まれの学長はまさに現時代の先駆者といえる。尋常四年の修身科で自立自営の自己確立の基盤が生まれたと聞く。現在の学生はもちろん、教職員のなかにも学長の教育の理想像・教育理念は古いのではないかという者もあるが、私は同じ女性として学長の方が何倍も何倍も新しい考え方の人と思っている。

今は女が外で働くのは当り前の時代になったとはいえ、外で働く女性の足を引っ張るような事や思想は日常生活の中に、まだまだ沢山ある。いまもって家庭と仕事について悩みつづ働いている私が、学長に学びたい事は家庭人と職業人としての女性であるが、夫や子を含めた家庭生活のやりくりは勤めて29年目の今も分らない。ただ何時も関心することは、お姑さんや家族の悪口のような事を一切聞いたことはなく、私の悩みは心から理解し、励まして下さる。創立三十五周年記念誌に「二十七年間勤めをしたけれど、貯えもなかった。それは、武田一家の生計の全部を引き受けてやってきたのと、私自身の勉強や研究にも投資してきたからである。私自身の生活は節約に節約を重ね…略…武田家に対しては22年間、物心共に自分なりの最大限を尽くしてきたので、今でも決して心残りはいない。」とあるがこの言葉は折にふれよく聞く。学長だからこそ立派にやり遂げられたのだと感服している。また記念誌に、最

初のカリエスに罹られた時ご主人の妹さんの看病を受けられた恩やお姑さんについて書いておらるが「母は、実に優しい、心の美しい人であった」と、いつも感謝や賞めことばかりを聞いてきたように思う。

勤め始めた頃、家事と勉強をどう裁こうかと悩んでいたとき、ご自分のことを次のように話された。

「学校から帰るとき、他家の着物の縫い替えを貰って帰り、家が見え始めると片手で袴の紐を解きながら、解いたら握って歩き、家にながって手を放すとすると袴が下りる。それから着物を着替える。御飯や風呂の火を炊きながら、預って帰った着物を解く、洗う、板張りをする。夜の後片づけが終ると、昨夜洗い張りした着物を縫う。終って、教材の勉強をする。翌朝、学校に行く途中でそれを届ける。……こんな日を繰り返した。」と。

学生の皆さん！ いや女性の先生！ 今の貴女にこんなことが文句なしにできますか。やはり学長は「生家の親より舅・姑に孝養を尽くす」明治の女性であった。いいえ、神業としかいいようがない。

こうしてみると、人間・武田ミキ先生こそ、最も新しい人、現代女性がかくありたいと願う生き方、真の飛んでる女性の生き方を全うされたのではないだろうか。

夜道を、ひとりとはとぼとぼと帰りながら、

「為せば成るゝ、為さねばゝ成らぬゝ何事も、成らぬはゝ人のゝ為さぬなりけり。」学長の吟ずる声が聞こえますか！。

「金剛石もみがかずば、珠のひかりはそはざらむ。人もまなびて後にこそ、まことの徳はあらはるれ……。水はうつはにしたがひて、そのさまさまになりぬなり。人はまじはる友によりよきにあしきにうつるなり……。」聞こえますか、学長の大好きな尋常唱歌の声が！。

(豊後孝江)